

續歌合部類

下



須智通
舎之章

續奇合部類卷之十四
四下五番奇合
題

建保三年六月

吉野弘隆藏書

續庫

吉野弘隆藏書

春山朝 夕早前

行路秋 曉時雨

松經年

作者

左方

御削衣

大僧正行意

權大納言源朝臣通光

權中納言兼左衛門督藤原朝臣志信

參議左邊衛中將藤原朝臣實氏

沙彌寂印

宮内卿藤原朝臣家隆

散位藤原行能

蔭孫高階家仲

右方

前大僧正慈圓

參議侍從藤原朝臣定家

左邊衛中將藤原朝臣雅經

右邊衛中將藤原朝臣家良

後成鄉女

丹後守藤原朝臣範宗

左衛門尉藤原朝臣秀能

備前守源家長

小比叡祿宜禊部首祿成茂

判者

衆議 詞宸筆後日被下之

讀大御言...

讀大御言...

讀大御言...

讀大御言...

讀大御言...

讀大御言...

讀大御言...

讀大御言...

讀大御言...

一番 壽山朝

丸勝

新製

春はさめぬ花がらゝの空に明しくあはれゆく山

右

前大信正

羽衣のめおしと人乃袖は色もそとてほろろと

二 せし方り云ちうらみの誰とわづらふる余は

しと霞の光はくもふいせをたてたうらふ

と秋よはいまはしと浪乃とよとく何と方中白雲に

は誠まゝとすおと侍のさし霞は花雨にふ

むくかふゆきのなるまはれは難しわづらふ

大方又中日わさ明れ山乃松凡花れ書さる
色にさるしちりしきふ海をうたふとさし
ふし大方又中日松凡奇山出る歌す
仍以天勝と和作侍ふ

二番

尼持 僧正
新らさげるとき山は雲より野をうたはる言れ声

右

侍臣近原朝臣

一 大方中日わさ明れ山乃松凡花れ書さる
いして雲をけりきん海しきとてひくかん
ゆるたはるとき山をれたいこのひめあさ
けのなとていしてこましく古方をかへりて
をりてくして力持

三番

丸

権大納言源朝臣

山はれりてあはれ袖のふりか舞氣さゆりよき雲は定

右 膳

雅經朝臣

いほしあしわさわかき雲はあさる霞てうき山風

さきかろをよす日なちふゆの秋の神もた
あさふの雪ハルれゆしこいゆに
ゆか勝

て番

三九勝

九馬踏原物

明なる

まん山とけりし雲去ハ生にきり

た

右道中將原物

花の露散りてまおのり胡震なるゆし山乃真白書

た方々云た方上句とゆりゆりゆりゆりゆり

よせゆきよゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

いづゆゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆめ勝

云番

た

右道中將原物

あさ霞の雨の山を秋とく花れ志をゆりゆり

た

後成郷女

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

あさ中日月奇心ゆりゆりゆりゆりゆり

いづゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

よゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

竹上白玉梅とソい下白上花とをける後
かき花あまうとさるく物な
そ下上さるくあまて物と物と
ソい下うき歌とと物と

六番

九

沙汰寂下

花の色は枝とこもけり梢を月日り白く見ゆ地山

太 括

範宗卯辰

大かき春は月と花のうしろ月も霞山は乃月

花太考しり日た分と歌をく物と太考

大かきお月ろろとソいの家もすくはとけ
花いませすくすくんと物と申物き

七番

九

家隆卯辰

大かき山月けり山と花は物と物と

太

秀徳

大かき花は光りとしけり霞と物と物と

大かき山月けり山と花は物と物と

大かき山月けり山と花は物と物と

大かき山月けり山と花は物と物と

ふ了員之由り之

八番

九

行能

細かくたのむるを成し其のときつれなき山奥成

六

家長

朝日けし月入心術のまじりて成る山奥成

た乃り日ま田れ成し其のときつれなき山奥成

丁方其願乃期きつりし事なりし立別し

北よりしや之

九番

大橋

高階家仲

横室之峯よみれし其のときつれなき山奥成

大

成茂

山とくし其のときつれなき山奥成

たたきしや日あふんそつくりして案ふり奇

と見し物れし海をそたなりさうりしうと見

こいへ物御まらうりしうと見

十番 又早苗

大勝

新製

早苗うら山内わせにせく水たみしはよもは月来

早大

新大借正

善ねといふお首の山向し雨を降ゆて晴鳥の
十を方中日晴鳥のくといふ願ふれつて
事し詠詠乃所しゆくた方又し云れ
う所しやん方又し日あしんれし詠詠
わしと定有甚執れ於る於んた為勝

十一番

片持

借正

お首の山向し雨を降ゆて晴鳥の
十を方中日晴鳥のくといふ願ふれつて
事し詠詠乃所しゆくた方又し云れ
う所しやん方又し日あしんれし詠詠
わしと定有甚執れ於る於んた為勝

侍臣藤原朝臣

わしと定有甚執れ於る於んた為勝
た方しん方しん方しん方しん方しん方
た方しん方しん方しん方しん方しん方

十二番

片持

借正

お首の山向し雨を降ゆて晴鳥の
十を方中日晴鳥のくといふ願ふれつて
事し詠詠乃所しゆくた方又し云れ

片持

借正

お首の山向し雨を降ゆて晴鳥の
十を方中日晴鳥のくといふ願ふれつて
事し詠詠乃所しゆくた方又し云れ
う所しやん方又し日あしんれし詠詠
わしと定有甚執れ於る於んた為勝

十三番

借正

凡胎

九尾の昔藤原卯辰

夕れかよふ君は昔うらみかき音はきくはかきか

た

大田中納言宗房良

月乃小田れの縄よりてなれ日さし昔互く

凡方中白を田れ志ありあかきとて

い(ろささうそく)とてえとてあつたら

之陳り自以の信

十二番

凡持

凡中納言宗房良

よ商うう賤れとてそいやはと君公のの雨以言

右

後成郷廿

善ぬそていりる昔をたあを風さそ雲上ははれ雨

凡方中日風うえ雲ふるは材多願村をれ神也

但そをれいのつこいるわまりこてて

さゆくありし本願寺とそ世公ののつと

らんんれた方中日所むれ能はよ

とそんゆりたそそそとそいのつこい

そん活よあ遠れたそそ大略

かそそこのよわな

十二番

十八番

大ね

階家仲

を崗之懸のふすすつひ袖ふつひ首さく

大

成茂

立信(五首)や女れいもまみいとすそも物清ん

た方中日太方いとすそも秋の清ん

そとけりさゆてりれ新し物わぬきと

ありておるよもゆき

十九番

行路秋

大ね

河原

らゆり色とるれ深きも秋のふく風舟成

右

前大信正

まのすかひふさきも山吹の尾流るる秋の夕昏

た方中日尾流れもゆきとつゆき

小のゆきも方中云尾流れもゆき

送恨く相直ゆた方故中留りもた程を

捨くゆきもゆきとゆき

二十番

大

信正行意

ふゆり枝下流るるゆきもゆき

右橋

信濃左原朝臣

うらけりて西遠方松屋白鳥上よも世草花色以爲る方
右方中曰とちお上りおしとゆとん一秋
乃ここの心とてうへえのてくゆり方
中曰ともふゆり一ゆもしうもき方と人乃
病いともとてうへ色うへやと西遠方

才一巻

凡お

狩大納之原朝臣

茶花中よりおゆとふ事とすそゆも色うへ

大

雅後朝臣

紅紫くも河清定めの焼くまゆ野山みらたうり
れたとも一昨日のゆり衣たれとゆ
野山もにようりてゆ

才二巻

凡給

凡給の結藤原朝臣

茶花の房とゆとてまよか油こも秋ゆゆ

大

大也中の藤原朝臣

常盤山より秋とゆゆとゆゆとゆゆとゆゆと
とゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆと
いとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆと

大方中日家袖こりてこころおほく
けうの勝

大之書

大

大逆中将藤原朝臣

美原、流丹、秋、行、着、の、度、枕、落、し、と、ん

大橋

後成の母

出、音、也、且、方、年、月、日、結、風、高、く、と、り、成、新、志、原

大方中日太字、一、は、は、き、や、り、く、結、

大方中日秋、さ、せ、る、誰、や、あ、方、中日太

と、こ、り、了、勝、り、の

大之書

大

沙弥寂下

さ、ま、り、野、乃、味、花、御、り、送、と、と、上、元、同、は

大橋

範宗胡尺

秋、中、紙、肝、の、ぬ、油、も、高、相、ぬ、ま、い、ま、は、藤、原

と、方、中日太、れ、て、行、ま、れ、る、地、藤、原、宣、侍

と、わ、ち、方、中日太、道、も、さ、く、ま、い、し、い、つ、は

又、高、さ、く、ま、く、ゆ、り、た、と、も、い、つ、日

ゆ、き、は、く、れ、と、く、ら、と、こ、り、ま、い、し、い、つ、

大、の、以、太、為、橋

亦七音

九

高階家仲

猿金をけりふふる下りみくら袖とてとらねん吹

七音

内殿

床の音も袖とこけりておほい送るはを我深切

と方中曰床の音は猿と袖とを待

よりと方陳し曰うてたにけりて病

なり道老よのつとれを深ゆをを屋

りけくをゆれ九方又中曰ゆり

た方とわかからぬとゆりて一息

床の音入うて けりてと見り侍

りてと不音やま

亦八音

曉時雨

七音

可製

つとふ衣のほり時雨は有明れ山は雲

七

新大徳正

晴は空は色もたけりてあしをて身立のけり

九方曰と方ぬりてとわがけり

その計法はるる 九方曰九音下

勝

廿九番

と

僧正

わし山住よりしほりてはあはれ時雨ふせし曉を鐘
相考相 侍後藤原相良

ゆとるまぬは産國を明なそたぬし枕をくら時雨の
とちんちんはほろりし度え哉こしひたそり
ぬあはれはうらもころはぬはとけり誠
さいもこもともころりも見るはけりゆし
きいし地すし中あはれはとまふさふ
むねは時雨まふさうきまもころりもけり

三十番

丸持

持太師之御幼尼

鐘は音は時雨とては格好よりしてうらまのあま

太

雅後朝臣

よもよもは明方うらまは格好と度えうらまは格好に
たふと芸しり日屋さしきいぬになん
けりけり力持

三十一番

丸持

丸持侍藤原朝臣

曉恨みく人がけりてうらまは格好と度えうらまは格好に
宿

大

大田中将藤原朝臣

さくらばる有明の月お山を照らす時を以て

らん方了日太秋させろくましくはた方了白

うさてさくは麻ちよれ高むくは

ゆか勝

三十三番

らん

大田中将藤原朝臣

月影さみよまよるく明来は暗而吹まきあふ

大

あふそり子豊事一山の持

あふそり子豊事一山の持

三十三番

らん

大田中将藤原朝臣

あふそり子豊事一山の持

大

大田中将藤原朝臣

あふそり子豊事一山の持

あふそり子豊事一山の持

あふそり子豊事一山の持

あふそり子豊事一山の持

あふそり子豊事一山の持

三十一番

九ね

家隆 ね長

暁やこねしも色はぬるゑ院時菊に袖より花の

七

秀 徳

うねぬしやひのねる瞳るねよをねが物ゆか
な方中目七事誠おしくゆきまし
われぞもし九事ま家も色はぬる
こついで何あよ袖あふららこ
とびついでそく園ゆきした方
定しこつねふさくんて待たし

哥 暁しこくもあつらふ事

んともかきくゆらあ方ましく

わのゆきゆ持し所待ま

三十五番

九ね

け 新

暁のねりけ山を山下小雲あ入有明

六

家 長

そはえとねんち有明は袖あしる
夫方やそも雲あ入る
くゆきと事しんあつらふ

しちちちちとくみて是のちりたる方
と日と人のまゝとくいと心は初由
はくいとていゆは初よりゆきゆか
二十六年

九月

高階家仲

しちちちちとくみて是のちりたる方
と日と人のまゝとくいと心は初由

九月

成茂

清の昔は秋は度多ふかぬ秋は色深く
九月廿一日のつひはゆか
定はり

三十七番

九月

川製

ついできぬかひ乃霜れのかき
九月廿一日

九月

新久保正

君は代は子年しあきとまてとせり
九月廿一日

九月廿一日

九月廿一日

九月廿一日

九月廿一日

九月廿一日

尚九可勝し由た方定し中仍為勝

三十八番
九勝

作正

身に及て居候人ふ世以初とてさう未だ松のこりん

た

侍従若原殿

の心草書もしくよ、與とき「濱松教と色かひの書

たたきし方、うまひありさゆふゆり

をう勝し由り也

三十九番

九勝

持大心之願殿

非道出来し百枚に松の陰しおゆへははら珠物ん

た

親徳殿

いよその松はさうえよこいさ、いさりの心懐せしむ

たたきし方、うまひありさゆふゆり

くみくつとたふんと紫もむり

きよし各中しお持

四十番

九勝

侍従若原殿

限り時を去しおるの志候は候松とておん

た

持大心之願殿

任古れ言乃之、此神さひて昔より志ね杯色哉
其た太芸に中曰た辛うろくくつり
ゆめ勝

四十一番

たお

た道中坊若原朝臣

ふしつてくもわらふかた松原をういすま坊
た

た

信承の女

あしうきて君うたりく、信承れ松も昔せと神を
きとた芸之あま事ゆりゆ為た

四十二番

たお

沙汰宗印

任古れ言乃之、此神さひて昔より志ね杯色哉

た

頼宗朝臣

限りく君りうろく、年成てを成まをま信承れ松

あふち心日々

四十三番

たお

家隆朝臣

津代もいづようけし子うてあゆ山あま松

た

あつ能

思ふと山とす名の松くひもなきうろく、年成完

たたり日掛りりかゝるを神曰く
為侍

四十四番

たね

行舟

自津浪きよは候かうりてきりも神はあはれ

た

家長

より君れよしひをばねはひちり下はれ美代恒ん

たたきよし日あ方秋日斜く但しき

きぬのこねねをせしこころいさしり

まさうくくやゆらんたろ又流玄ん

何為侍

四十五番

た 侍

高階家仲

君民よきぬれ乃峯れ松なりし色ね世にわ

た

成茂

いこも世をぬれみれえ方松の陰居るあけ

たたきよし日掛りりかゝるを神曰く

たね

正一 位 行 傳 人 徳 義 宗 氏 自 公 柱

續奇合部類卷之十五

百番袂合

建保元年閏六月九日

題

春二首 夏二首 秋二首

冬二首 戀二首

作者

御制

正二位行權大納言源朝臣通光

正二位行權大納言藤原朝臣云經

從二位行權中納言兼左門督藤原朝臣忠信



冬議正三位元近衛權中將兼近江權守藤原朝臣實氏

從二位藤原朝臣家衡

從三位宮内卿藤原朝臣家隆

八條院高倉

兵衛内侍

藏人正六位上行元衛門權少尉藤原朝臣康光

春右 夏二首 秋二首

右大臣正二位兼行元近衛大將藤原朝臣

冬議從二位行治部卿兼伊予權守藤原朝臣定家

二條院讚岐

如房越前

冬議從二位行元近衛權中將備前權守藤原朝臣經通

前丹波守正四位下藤原朝臣知家

正四位下行右兵衛督兼伊予及藤原朝臣雅經

從四位上行丹後守藤原朝臣範宗

散位正五位下藤原朝臣行能

僧正行意

講師

判者 治部卿藤原朝臣定家

或本無議判後日付詞畢

一番春

凡

御製

浮雲ふいは色をむとわさもあ
り神にりあま乃じんくえ

右

法部卿定家

あつちいひとれていよく次梅乃を
うへあまくいりくく来乃月
乃名名海平了もく新く由

顔之伴ち方秋人号くえん

文すくく新と似秀造れあまに

むとくえよらりくえ方れんと

ありひてしうれと梅とくえも子

しとくえいあ神よりあまのじ

えんくえとゆもくえにゆ病こ

中留ますくえ太方けぬさゆ

乃河とくえくえくえくえくえ

とくえくえくえくえくえくえ

くえくえくえくえくえくえ

中納言と信別執定物乃字
成りしれゆめい定給後代を
頼紀

二重

ん指

指大納言通光

せいのわらききさ姫れ花うのら
あとりけてもくろくしる

者

源次

うく風やそめも世と若つらん
香ゆりさうりいはさうりひ

ちり袂人から中中云美を集よ

けあせとせに花うくせよ

とりあちゆくやきさむを

かすまての姫れをわくとい

らん中になく袂のわくまがし

くやゆらんたさくしこし

よれりつさせいひくさそと

よやくあやれんたれし集にゆ

し一袂ふゆあゆひさうてま

よくゆりし申たさるるに

やまとなつらんとしるるふあは
ふし古方中せとる方當ふら
こそはゆめめさ

二首

たは

柱大納言

ま柳のいしをえんそりにうけて
わをすはまぬ行とるはは

古

越前

教りねとあらんいふし梅乃をれ
とよふおれもけりそてはうり香

あは縁よりけりてあはひ
あうてゆとらむをいふ

しるあうそやしてけり
あやうし人ゆしと宮内

あまのむらたむ下向は
うし新しゆめわは

三首

んね

なほつ

あう代れりあは物のもあは
うしあは七張りあは

た

た中ね道

あふれつともいふとれ跡はる
けられのわさしそこのしくと

ちかきしる代の百あれ梅こと

らりかきつさしはやれん

あけの道初ち年平くをけり

れりさ乃梅とりりりてそ

く代のりさよとふしつさしや

きりし移えれれはれよ及難

しち方又けりいりもくれ跡

代りあしりち道しりりりり
中

五あ

たね

た中ね道

ふさくしりりりりりりりり

らりりりりりりりりりりり

た

知事

むりりりりりりりりりりり

とりりりりりりりりりりり

ちかきしる代の百あれ梅こと

ゆとらわねて白やきりにまゝま
てゆらんをきりなりうりも又
日経れ半とてわね
ちあ

ん

送之信源衛

下乃川流つるのれ早きま
かそみかあう向く浪乃まを

太極

範宗

花れ者はありしやにじ女子
そて物つさかうくひとを

ち方とては流はるる早きま
起うのやうなわて秋れそら
坊しくもいして中家屋んか
みあかろこといひあは信乃物
とゆもわねられし中家屋んか
ま内はあま物にまよま
新あな物にまよまのこ
つしやとていひてそて物
らあま物にまよまのこ
えゆらうやけしむら

ほくはかりまうねとこりも乃
若いよしゆりゆりすす
申て梅に結ん

七巻

たね

いふ

そりれしうすにそりゆり
梅さくさくそりてそり

た

たね

そりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆり

八巻

ん

ゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆり

たね

ゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆり

つうなまことこしくふまじしん
信のこまはせわかけうふたの香
やうくまねううりりてとて
九曲

んわ
ん酒つ耐康光

昨日えし新酒れ梅の露よけり
梅よけりる庭れまうあ

七
行能

ま風ふうくひとまもふむれう
あひくろくとかくろかりうの

ちろりしと新との梅所のあて
梅よりあうらうま風とああ
らしとあまのまあうねとあ
ふあうくひてゆれと活をす
能くあまのまもあもれあま
居合れりああうあもああ
あうゆあああああああ
ああああああああああ
れ物と定り

十あ

十ん

ふむのふむ

らなれとら考にいらるの梅のむ
く種うねくく甲子乃存

大翁

信正の意

そらつらつらくはむやうらん
ゆねら海と雲のふらつ

れららららてはちたよまな
れららららちちちちのこ

井を花のからんくくく
て海とらふらふら海とゆら

しらしらんに及くはゆら

とてわ翁

十一

大翁

御前

せんよあひあふららん
花うらあむらめらね

大

信正の意

らく花らあふららん大翁と
のららら見を次く

とららららららららら

た方人たはよ御吟お子馬年不
申是此か翁

十二首

石翁

信ち西宮西光

山門より雲河水、しとくせんしとく
風もさゆ〜ぬ花のさ〜信

た

灣夜

いあ〜く乃甚妙しかつら〜るれ
き〜ののむに也忘れせと

き〜井のむに也〜すれせと〜

き〜りやよえゆれと春ちり〜るい
〜と〜先と〜風よ〜ゆ〜ぬも乃
白浪お秀逸〜也ぬろさ〜

か翁

十二首

ん翁

信大納言信

眠る〜さ〜方〜ら〜う〜なれ甚〜風れ
中〜し〜り〜こ〜い〜わ〜ぬ花のさ〜里

た

越前

心ちか〜の〜さ〜い〜れ〜凡の白〜れ

花らりくらくもあうねまのう
中しりりさあね花のぬくね
にうらうらあねまのうと上た
言しちう方出の入新古今う
内中しねさあねねぬぬ
お似中神名申のうたわね
十回返

んね ね海智志信

ふりねあましあわちねしあ
こふしよあまのうらうら

た ね中ね海智

雲の尻ふあれ神のうらうら
うらうらあまのうらうら
ちねしあまのうらうら
ゆれこねあまのうらうら
つふらうらあまのうらうら

んね ね中ね海智

初ね川をのうらうら
あまのうらうらあまのうらうら

大

前丹後が新敵

はくしんたふらうらわむ城ふくの
ちんしんくまうあむりぬく

わか

しちあ

ん

後之信が御

のしんらくはあはしんたふらうら
うらうらあむらふものちんあ

な

丹後が新敵

雲の束れ脆月吾に敵のりり

花のとうと志くしけいあ

あさや日ゆしとあむらうら

花のほろとやゆらうらうら

はるま定してゆらあむらうら

歌ふえゆらあむらうら

ゆらあむらうら

なむらうら

たせあ

ん

是の如くして行ふと申すはよりの事なり

花よ新しき花の如くは

名指 ちんちん

よき事にては花の如くは

ゆかりの如くは

花より上らば

とては花の如く

一つは

んちん

花乃をいふ事一とては

ちんちん花の如くは

花 ちんちん花の如く

んちん花の如くは

花の如くは

花の如くは

花の如くは

花の如くは

花の如くは

十九

んね

尾野村康光

昔御や〜〜守か〜ねらち〜さ〜れ
うふめ〜〜ぬ〜さ〜〜れ

た

教信行徳

え〜〜の〜〜ら〜〜り〜〜り〜〜り〜〜り
い〜〜れ人の〜〜り〜〜て〜〜り〜〜ん
ん〜〜さ〜〜す〜〜れと〜〜るわ〜〜る〜〜り〜〜り
あ〜〜る〜〜り〜〜り

たあ

尾野村康光

んね

御殿さ〜り〜り〜ん〜り〜り〜り
色〜〜り〜り〜り〜り〜り〜り

た

信正行意

花〜〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
り〜〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
り〜〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
り〜〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

わね

たあ

んね

御制

おのむらびの暇いとわらへて
月うらふらふにわらへてはな
た

河をたうたの先とまうとて

山のきりくに野のうらふらふ

んまうまうん様やと備はたし

わわ

たうま

ん様

風うけいんまうたきまうかりん

んまうたのうらむはれ川

た

海

のうらむらふたよとわらふ

んまうたまうたきまうかりん

ちまうたきまうたきまうかりん

うらむらふらふにわらへてはな

やわらふらふにわらへてはな

うらむらふらふにわらへてはな

たうま

ん様

海

都へ行くやわなれぬを
ふかよあゆみ夕暮の声

大 遠く

叶ふにゆくやみもさる人
中夜月夜よりこゝろ

たふしとちかき月夜を
うめくはる秋の風

名定所の橋

木更敷

ん

右記

少少のふゆとらふれぬ
志はくはるふゆを

大 橋

右記

夏外のそとふゆと物な
あはぬあふくはる

なちなねゆちとつゆし
とちかき月夜を
秀美しゆあふゆ

橋

木更敷

ん松

寛文

ししむに林のまありは玉葉れ
るししむに林のまありは玉葉れ

太

初夜

あしりなれあしりなれあしりなれ
あしりなれあしりなれあしりなれ

ん松又一回磨尖仍わ松た方又

ん松

太

初夜

ん松

何より松のうさねのうさねししむに
何より松のうさねのうさねししむに

太

龍宗

何より松のうさねのうさねししむに
何より松のうさねのうさねししむに

何より松のうさねのうさねししむに
何より松のうさねのうさねししむに

何より松のうさねのうさねししむに
何より松のうさねのうさねししむに

何より松のうさねのうさねししむに
何より松のうさねのうさねししむに

何より松のうさねのうさねししむに
何より松のうさねのうさねししむに

何より松のうさねのうさねししむに
何より松のうさねのうさねししむに

一節ふゆ白きりく先乃回心
しりりしり半所一又夕何
長小念のふみうく原此と子
方此り白よ似や秀方うまん
半やましくやゆきことしにこ
出しゆくふゆあさこりやゆく
こくし上ゆき太釈す能也
方終ゆゆしうしに何治也優に
ゆれのゆよは定

亦七也

た

言念

夕下く礼花しららるる白り
ゆく時ちちちりしと路し

太孫

太孫

ゆる月如やししとらつよ部云
くしとちと向くふ木白れら
た釈すゆ半太下孫く由名

申

亦八也

た

言念

菱ふた濱りあにわさす南て
まのくも冷しうしりりま

太

志多乗船社宛

何ちなりくや月のおくしんま

うさく知りこして鳴る太たれ

さきうなりくやこぬる玉くけ

とつしけしうらなぬる玉たれいむ

まうしておよろさこしあさ

たこししてわ猪

木丸あ

丸猪

徳島村康光

われつても増せぬもの其せれ

ちのんあわりあういひの灯

若

行能

うしつねはまあま後下しん水

るらんさねて秋をらうつく

太すしんしんふあらす左海せぬ

物らんんがうりとして猪ゆさ

木丸

丸猪

水隆

何れに中々しくなれりしに
交りしは年と掃あり

太

行交

夕下らんさき此のうらみ
何れに中々しくなれりしに
交りしは年と掃あり
中々しくなれりしに
交りしは年と掃あり
己のうらみの中
中々しくなれりしに
交りしは年と掃あり

太一

たれ

御覧

御覧門交れは水とや
新もさきの中
交りしは年と掃あり

太

定数

夏に門交れは水とや
新もさきの中
交りしは年と掃あり
に優美にさきの中
交りしは年と掃あり

太二

たれ

西文

風よりあひくささ乃川信ららさか
らぬあきらら子さらのうら

た

博収

柳り枝うらうら信ららさか
あきらくささ乃川信ららさか

たれ門信あ秋作らやあ

あきら信ら中あさうらあ

あきら信らうらうら信ららさか

うらうら信ららさか

たれ

たれ

西文

あきら信ららさか乃川信ららさか

あきら信ららさか乃川信ららさか

た

博収

あきら信ららさか乃川信ららさか

あきら信ららさか乃川信ららさか

あきら信ららさか乃川信ららさか

あきら信ららさか乃川信ららさか

あきら信ららさか

亦何事

ん

忠信

ふもいふ所よさらば友の
光りしき友の光りし

太極

淨道

信りしき友の光りし
晴りけりてかたし秋の段

ふもいふ所よさらば友の

光りしき友の光りし

中も信晴りけりし友の

ふもいふ所よさらば友の

亦何事

ん

實長

ふもいふ所よさらば友の

山何事せしれりし友の

太極

知家

日影のうきし陰のうきし

夕日しき友の光りし

夕方しき友の光りし

とち秋しき友の光りし

名としてわす

可ちあ

ん

遊衛

朽らうは月のうらうは川うら

そとさしあかると大の歌

太極

龍宗

うらわさうれとんねさあ

ささ方人た夕くは乃花

に方ち方おと新出さあ

新ち歌うらうさうあ

名としてわす

可ちあ

ん

遊衛

まうねの友のうらうら柳うけ

うねうらとあや枯の道路

太

太極

まはりやあまのほきうらうら

うりれいすしじりまのそ

は名に新く由あさあ

可ちあ

ん

ふみまひ

新らうといた船窓のふよしく風れ
ふくしうなまをれあしあまはら

太極

新極

る河しあめあしうの流よあまあ
あましとるこねらんこれあは

れ歌を優よこししてゆりしあ
ゆしあよあまああましとるえ
ぬあ月ああす極よ由ああ定

ト

此れあま

ん

康光

あはの池乃あまれえんうくれり
こまの鳴ありあまああは

太極

新極

郭とあまきくああまのあまあ
あまのあまきくあまああま

あまのあまきくあまああま
あまのあまきくあまああま

甲中あ

凡縁

歌隆

杖とての増れあつてとて夏とらて
日と夕とれを風をすくし記

太

乃定

玉よりわく夕浪草のれちて夏に
やうと杖とてとてさみされ乃定

夕浪草の白ちりて杖とてま
えゆれと増のあつてとて夏
杖とてとてとてとて杖と
杖とて

軍一巻杖

凡縁

御割歌

夕霧の難乃杖のこら杖とてとて
とてとてとてとて杖とてとて

太

乃定

なるとさうれ杖の海舟にそと夏と
乃の杖にあつて杖とて杖とて

夕霧の難乃杖のこら杖とてとて
ら杖とてとてとて杖とてとて
んゆゆとてとてとて杖とて

人れ種もんてましとらつて
見とらうくもゆける也あ方
たにしてわ休ち方と秀造し由
有沙粒

四十二番

た結

通光

こころすんふうに東に結風
薪の氣ふうくもあそらうそ

た

徳波

あひの結やれ移名に苦りて

月よりすうりにけりつれ

里よりにんふうすあれ結り

あそあふゆらんやあ

とやんゆりくとあ歌うそ

ふあしとてつんわ結

四十二番

た

公經

あしつらあんにそらうそ
あそあふゆらんやあ

た結

徳波

とんねんくさふら路の木のふかき
たうじりるるもくわくは都
かりしひの鳴りつらうくにわたん
えぬ木とてふんことひいふ
かしくいづのえぬとるむれ
ふと木のふとならむらひ又
うらうこそわづ

軍中書

んね

たは

木風よ小田れあつたのあひらきよ

なむくまふふのあかそいらつて

た

は

ねめふ人ちめくもやわらうふれ
少地のちのあまふのふれ

んいさうらふにまふひん中

かりかのうわくわあまうか
ちるふしとのあまふいふふ
とかのあふらうらう

はゆめていこくちうか
るふとねるふらふゆてね

移る

早うあ

た後

寛文

りみちら比の門の穿れよのれを
うきそてなうれぬ秋の色に

太

初歌

天門秋うぬれんうれふ
うそのちうくれあたらうん

秋うぬのうれ挿すさ
ら新うぬうくゆわ川

れ穿れ秋の色をうくあり
つれうりうそつたわ後

早うあ

ん

寛文

秋の色にうりうそつたわ
ありしむ凡のうれをむん

太後

寛文

秋のぬきそつたわのうそ
なひひかりうそつたわ

れう後わうそつたわ

とち作らんとすは之編み社に
てんく方々み竹をうらにち
門門也ち作結とつとんぬの色と
かまうりけり竹也とつとんぬ
そめく〇といふ方人もすよゆき
大款又よらうけり竹をうら
まうりけり申てわ結

甲午七月

ん結

う念

うらうら念のふれふら念

うら世とさうらうら念

太

ちち屋

とあり竹よゆら竹ひの色かみ〇て
わらうらうらに色あり念

浮世とつとちちち念

そらうら一函懐にかりて竹れ
とかかりとこの竹の色くらよ
うらうらてゆりゆらとつとんぬ

うら念わ結

甲午八月

んね

そまゆら

秋の風をうらやまされ風うらた
ねのさしーさうさうのさし

た

秋風

あーらーら秋の風をうらやまされ
秋の風をうらやまされ

らーらーらーらーらーらーらーらー

ちやんちやんちやんちやんちやんち

四十九番

んね

康光

秋の風をうらやまされ風うら
とけい旦夜ゆくのさし

た

秋風

あーらーら秋の風をうらやまされ
この秋をうらやまされ

たちちちち今に秋の風をうらやま
そまゆらしてまね入るのさし

そまゆらしてまね入るのさし
秋の風をうらやまされ

きりりしとて梅こころを

うすむ

んお

お隆

も向ふりみらの梅ねむいけむさ
ねむけけのくふちもむ

た

ゆゑ

きりりしとて梅こころを
くふちもむ

くふちもむ
くふちもむ

ねむのくしと梅ねむいけむさ

くふちもむ

ねむのくしと梅ねむいけむさ

くふちもむ

ねむのくしと梅ねむいけむさ

くふちもむ

うすむ

んお

御前

うすむ
くふちもむ

た

定歌

少麻らくはるの流れゆらぎは
あつしきまのまのほらとく
何しうねてうくや麻れは
かちれんしうくしきま
ゆとちちちうくしきわ
ゆきま

ん

題

言はくはるやうりくは
わらりてあれはれの下

た

渡

法人のつらうらうら
あひ乃痛れはとくし
わらりのまは乃らち

や

や

ん

り

あつしきまのまのほらとく
しれぬまのれりま

た

り

りらんめいなるよらみおつし
るやられ枝乃うらまぬ枝のか
何むぬえの枝乃うられを
ゆきやうあつれ枝の深水のを
と優なりりそてわと移定
の中うらむ

た

お信

ひらり信深ふ乃枝の風の言に
とみれとのうらまぬの声

太極

信西

られそい初力よいとら枝のを
つりれいんれ枝のなけ

なま難ある初めゆくとをれ
きとのうらまぬの声
と魚易速てとらまぬゆと
しとらまぬのうらまぬ
とらぬよとらと初て初身
にとらまぬのうらまぬ
枝の力けとつら晋室清中
節と感枝と初初初と中侍

獣老くひはを色にうりて媛
艶よりさうさゆしくは猫と定
ゆめれ

守りあふ

んね

美氏

うららさうさうさあうさうさ
猫のさうさうさうさうさ

太

初め

猫人のうさの白さあふあうさ
うさうさうさうさうさうさ

えのうさうさうさうさ

うさうさうさうさうさ

うさうさうさうさうさ

うさうさうさうさうさ

うさうさうさ

うさうさ

あね

美氏

うさうさうさうさうさ
うさうさうさうさうさ

名

美氏

邪しくは世をさうなうぬりて
こしのさうらうせう何らん
唐のついでこの世も
さうらうの世も
いづれも
にえんぬらう
たふ傷よ
すしとて
わ中七も
たは

ま今

いさうらう
跟もさう
七

おち

白妙の
をさう
おの
ま
内
定

わ中七も

んね

きき回れ

けふつゝもきしつゝつらさ風よ
もれはぬと明めこのを

た

新巻

虫の音といふ虫振をききと
やれのほ芽のをらうりり

らたよといふらうりりわらわ

り

お十九巻

んね

康光

ゆいひぬ枯の枝をきき
小ねりりら新やのなしけ

た

新巻

月しけと枝をききぬ今よりれ
寝えんとしれとくまんとま

らちちち新巻のききしと

しねき人やねもりくちねま

らしゆりちねたきき又新巻

新下向ふあねきしりしちち

中きぬわね

ちんあ

ん

歌隆

まののりかやう念ふとん
うねいふくにきやゆらん

太極

行念

沿あまのりかやう念ふとん
かふれんそそききききき

んあやうの傷にのちあやう

御音野の奥の枯風より入
ていふらんらんらんらんらん

しそそ心あわゆ

六十あま

んあ

御割

ゆきあまのりかやう念ふとん
あまのりかやう念ふとん

太

定歌

うしそふ形んもあまのりかやう
とふあまのりかやう念ふとん

あまのりかやう念ふとん

太極師の停滞り候り向歌隆

治現形強菊し芥菜狀都ふふ
さつじし世修念中しつんわ係
六十二番

んわ

與えん

おんそくあ紫言ぬふふ川の
ぬのそふにけりわしうれ

太

修後

おんそくわしれもろこのまらうん
あこのあそあところれ海と
ぬそふにけりわしうれ

ふらしくちりしゆしそ

あこのあそあところれ海と

わつらあそあところれ海と

わつらあそあところれ海と

わつらあそあところれ海と

ち牛らあ

んわ

とせ

ふ川のりみらのこくれん水

このまらうんわしうれ

太

修後

あふらぬお波のあしをさぐりて
しれわらうきの海をさぐりて
りけらのくしんたうおはるる
そくもさぐりておんこらり
あしをさぐりておんわら
ち中にも

たは

たは

あふらぬお波のあしをさぐりて
しれわらうきの海をさぐりて
りけらのくしんたうおはるる
そくもさぐりておんこらり
あしをさぐりておんわら
ち中にも

たは

あふらぬお波のあしをさぐりて
しれわらうきの海をさぐりて
りけらのくしんたうおはるる
そくもさぐりておんこらり
あしをさぐりておんわら
ち中にも

名尸のしと程つたわ猪

六十あま

ん猪

美氏

林のちまうつりにまうれ村をた
ふのこさぬ時をせしまた

た

初歌

難ゆら竹のこまやさいとくおの
しこまのこまやさいとくおの
んあすしこまはまのあえゆと
ちますしこま林のやにかし

こんこまふかしゆしかと打き
のこまこまぬ時をせしまた
あんほいあまゆしとゆわとた
うり定ゆしかにさすていまら
さ歌とそし猪ゆとち歌と
ぬ家難ゆぬさすしゆ
六十あま

んわ

初歌

あこまていしすひとちぬ初あめ
とらてのらぬをぬまゆし

たね

芝園内竹

夕暮は影波の暮り大いなりて
せんもあつらひなきをかりけれ

た

新緑

白妙の衣吹らばこころし
やうくあつらひなきをかりけれ

たね道ち橋うらふは橋たのな

吹あそぶあつらひなきをかりけれ

うらひあつらひなきをかりけれ

ち中丸あ

たね

康光

山風うらむあつらひなきをかりけれ
あつらひあつらひなきをかりけれ

た

新緑

夕暮は影波の暮り大いなりて
せんもあつらひなきをかりけれ

たね道ち橋うらふは橋たのな

吹あそぶあつらひなきをかりけれ

うらひあつらひなきをかりけれ

あつらひあつらひなきをかりけれ

やうえてつんわ縁

七中もぬ

ん

歌陸

物園さ月のりきききりけと
かきくや千巻のなみきりかん

太極

ゆき

うらわらこもかか川の流れとひら
けうもぬきうよあきうくし

ん

ゆき

かきもけか川の流れとひらこ

うらわらこもかか川の流れとひらこ

太極とゆき

七中もぬ

ん

御別

うらわらこもかか川の流れとひらこ
あきうくし

太極

実歌

うらわらこもかか川の流れとひらこ

うらわらこもかか川の流れとひらこ

うらわらこもかか川の流れとひらこ

玉部〜他方より〜程たす
孫〜他方より〜沙路仍為
孫

七中二書

ん孫

通光

跡を月〜られよきりれあらふ
乃向り〜ふ色〜ら留て

太

彦波

〜ゆり〜た〜い存のあは
〜ゆり〜た〜い存のあは

〜り〜ら〜のり向神〜と〜ら〜
く〜ら〜し〜ゆり〜と〜あ〜ら〜ら〜
わ孫

七中二書

ん孫

公理

所よら〜ら〜今や〜と〜ぬ〜ん
里〜よ〜ら〜れ〜け〜の〜ら〜ら〜

太

跡あ

風〜あ〜い〜と〜あ〜ら〜ら〜ら〜ら〜
し〜よ〜あ〜氷〜い〜と〜あ〜ら〜ら〜ん

ついでにふしうきふしうき今新乃もあや

ふよるもあやしてわす

七十一の巻

たね

右伝

海風門あやふしうきふしうき新水の
きしうきふしうきあやふしうき

た

経通

海風のふしうきふしうきあやふしうき
ふしうきふしうきあやふしうき

たねふしうきふしうきあやふしうき

たのふしうきふしうきあやふしうき

あつふしうきふしうきあやふしうき

たね

七十一の巻

たね

實女

あやふしうきふしうきあやふしうき
月ふしうきあやふしうきあやふしうき

た

新巻

あやふしうきふしうきあやふしうき
あやふしうきふしうきあやふしうき

あふもえんふゆとあふ
あふもえんふゆとあふ
あふもえんふゆとあふ
あふもえんふゆとあふ

あふ

あふ

あふもえんふゆとあふ
あふもえんふゆとあふ
あふもえんふゆとあふ
あふもえんふゆとあふ

あふ

あふ

あふもえんふゆとあふ
あふもえんふゆとあふ
あふもえんふゆとあふ
あふもえんふゆとあふ

あふもえんふゆとあふ

あふもえんふゆとあふ
あふもえんふゆとあふ
あふもえんふゆとあふ
あふもえんふゆとあふ

あふ

あふ

あふもえんふゆとあふ
あふもえんふゆとあふ
あふもえんふゆとあふ
あふもえんふゆとあふ

あふ

あふ

あふもえんふゆとあふ
あふもえんふゆとあふ
あふもえんふゆとあふ
あふもえんふゆとあふ

らたまを指節又すゝる事

ゆわわ

七中八也

ん

きんじゆ

船人のわうふ浪らひ終つて

氷を志すぬしつひひく

名指

指節

わうふすそのまじりて

とくはふの浪のまじりて

氷を志かえれ浦つてひひく

ゆわわたりゆわわたり

すそそのまじりて

しきりのまじりて

さうしてゆわわたり

らわわわ

七十の也

ん

康也

浮きに底のまじりて

口尻をさゆりて

た

ゆわ

若白丸の田乃ももをとる海せは
うさに行きし底そのさねら
ちと挿籠のゆきさらしと
も丸鼠をきと死とくらとん
優形よりしりてゆ
八十数

丸猪

御座

茶の束枯れしりきとびと
りねおられねのきね

太

ゆき

とねらうりいりぬ乃水とねら
この門より水とねら
太りぬの氷とあさりいりぬの
つとまいさるまえゆきゆき
ゆきとんねらゆきゆきゆき
ゆきゆき

八十数

丸猪

御座

一十のりゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

た 心お

まうまのふのふのふらふらと
まらふらふらふらふらふら
たふらふらふらふらふら
ふらふら

ん 通え

あひらねつれふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら

た 渡波

いふれは渡のぬらむぬらむ

らあふまののぬらぬらぬら

ん けあふら
けあふら

八十二

ん 二

ふらぬれ人のふらふらふら
ふらふらのふらふらふらふら

た けあ

らふらふらふらふらふら
ふらふらのふらふらふら

ん方よりくすのくゆとちい
又優れり物よゆとてわ
八十の妻

んわ

忠信

くらんひゆふなくしていひ乃
を明乃存とうくしてん

太

経道

くんゆとひひりつるを眼
つれうくすし一神のあ
ち方こくに整よおうくゆ也

名ドゆしとたも回を明のはこ
にこくすいふれしとてわ

八十の妻

んわ

寛女

くくゆふつれなくしてし
受とちりしてなやん

太

知家

人目を家よりぬひゆれ志の
いはとくすん林のさかりと
な者うれくすく傷よさい

とくしわね

八十七番

ん

歌衝

歌懸いと一留のあふまゝのふし
るしとねねほよまはあつ

太極

絶家

うねれのこぢりてんてんあふまゝ
けあつ松のなつねこのんつ

ね物懸いと一留のちよまゝ
けらふふふふふふふふとちよ

トちよろしとちよろろとわ

太極

八十七番

ん

る念

のしよの流よわろしとちよ
うしとららねろよとちよ

太極

太極

月れまろ風とねあつとちよ
ふのむとちよとちよとちよ

ねあつとちよとちよとちよ

わらうやちちうらんよがうしん
物うさうしん物うしん各うしん

日わ指

八十九番

た指

な指

中くにあも守い何と序あ
うひいしねねえねい

た

指

秋乃田ぬさいれうしん
指うらぬうハかりにね

たしんかのうしん

とにうらしくあえ何とたれ

あをうら何と序あれこのしん

とあをうしんあにあをい

とこれぬ夕言れをねとく

れうらとそいねわ指

八十九番

た

康光

福ふとよあつね指しん

あひらうしん

太

乃能

子言其言ありありもろり記と
しり。乃能神をこころじり

ち方中をたしつふりしゆく
こ独りもこころしんしん
ひてゆりししゆらこくに指の
しに寝くら中に如ゆま
ち我神をこころしんしり
しりしりしりしりしりしりしり
う記

九十数

乃能

乃能

ちしり記神よりしりしりしりしり
う記とこころのわらしりしりしり
太 乃能

乃能はちの記よしりしり乃
しりしりしりしりしりしり
乃能の記よしりしりしりしり
えゆくと神よりしりしりしり
んめとちしりしりしりしり

九十七の巻

た

海鏡

ふり信も及んぬ海のあねれ
新よあつしむれぬ名をうつれあに

た

海鏡

らぬ人とやうかの浦乃々るは
儀やうりやの身もあられつ

あよらぬ浦のあねとふい
くもさうくゆきしちさかゆ

とたふよ年うれゆらぬやうかの

浦よ孫のうまを分るれゆし

何れもてんこゆくと

九十八の巻

た

海鏡

ちの孫やうらふれにやと
けうりの事候さう人しうれ

た

海鏡

うさかひし井りりのねいさうら
人のうら孫れあねにうらうら

敵身のうらに焼治又さうし

くしつゆしつよむた何んか
ゆくちうんゆしつふたゆ
九十九

んお

ら

わさくさくはのむれとせりより
神よあわれとかけてさなとく

た

た

くしつゆしつよむた何んか
ゆくちうんゆしつふたゆ
九十九

くしつゆしつよむた何んか
ゆくちうんゆしつふたゆ
九十九

九十九

んお

た

くしつゆしつよむた何んか
ゆくちうんゆしつふたゆ
九十九

た

た

くしつゆしつよむた何んか
ゆくちうんゆしつふたゆ
九十九

かすかす

んわ

きん

いふせんきけんふましはも乃あ
んよち〜ねねあのかう〜い

た

初歌

とくねい音あ〜りれた〜ねよ
あ〜い〜りねねあ〜り〜ん
〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り

ハ〜り〜り〜り〜り〜り〜り

〜り〜り

かすかす

ん

きん

は〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り

た

龍宗

いふせんきけんふましはも乃あ
んよち〜ねねあ〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り

にういぢのくさうしうしうしう
移とうく出のうしうしう
しくゆれい移ゆあさ
九十七番

ん

うい

うういぢのくさうしうしう
ああううしうしうしうしう

太極

あうい

うういぢのくさうしうしう
ああううしうしうしうしう

うういぢのくさうしうしう
ああううしうしうしうしう
えいしうしうしうしう
九十七番

ん

うい

うういぢのくさうしうしう
ああううしうしうしうしう
ああううしうしうしうしう

ん

うい

うういぢのくさうしうしう
ああううしうしうしうしう

あふ波ふりあふくしし流し

流はらふとせれくひてき流し

乃あふとふくしつらんふふこ

とにまふしし流はゆくとか

つあふ流あつししあふぬきれ

音あふくししくはひしこい

うしあふくしてわわ

あふあふ

んわ 康あえ

溪門るるくやれくしつれ

あふあふくもれくあふあふ

た ぬ流

あふあふにふあふあふあふ

あふあふくあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

あふあふ

あふあふ

ん 家隆

ふくもあはれ晴るるにさるるわらふ
くさけてるるなごあはれねま

大和 乃を念

あふのあふれ身にならぬあふれ
ふれふれふれ浪よきふん
古きふれふれふれふれふれ
ふれふれふれふれふれふれ
ふれふれふれふれふれふれ
ふれふれふれふれふれふれ

建保四年田六月十二日書寫之是為
清書下給先同書寫早九日夜依
召参 内勤講師畢而十一日夕又
相嗣判詞下給 判詞治部
卿筆也 書進之間
於傍令書寫之勝負字并作者
不可書入之由被仰下仍不書
不審

同廿九日以行能本書寫校合畢

右一冊以實相院增運筆翰令
書寫之再及遂校合者也

續哥合部類卷之十六

四十二番哥合

建保四年八月廿四日



題

夕草花

古寺月

寒山鴈

寄雨戀

寄石戀

寄夕戀

作者

尼

女房

經高朝臣

家宣朝臣

行能

信實

資隆

藤康光

右

家衡

推清朝臣

保孝朝臣

知家朝臣

範基朝臣

範宗朝臣

兵衛内侍

講師

知家朝臣

衆議判

隱名如恒

一番 夕草苑

ん掛

女房

みーまのやみあともく吹風う

色のりくこの花を染るうそ

右

さ米内侍

旅人のあかりかきつゝのそをみるう

あゝこのあかりふあゝ乃々られ

なちたふ能を指籠るあれ下白

えすもらるるやのわ掛

二番

ん掛

次子

多崎ゆかり子家よりくる風よ
らりして行くも秋萩のいろ

名

家郷

こころのうらみもやうらみ
子家ありて秋萩のいろ
ちかきと物首尻を付のらぬ
三首

んね

家郷

ららせし秋萩のいろ
あはれも風よりのあはれ

んね

家郷

目もあはれも秋萩のいろ
あはれも風よりのあはれ

あはれも風よりのあはれ

んね

んね

家郷

あはれも風よりのあはれ
あはれも風よりのあはれ

んね

家郷

此方神もよき言ゆわ猪
うぬ

此方

信実

あまらうさ尾花う神もよわわかまの
きここのつよ秋わかあううあく

此方

知数

子あ乃あ乃の秋れすうりあうし
うぬのけうりうと神りうああ舞

此方ああよああわ猪

六数

此方

賢澄

あまらうさ尾花う神もよわわかまの
あまらうさ尾花う神もよわわかまの

此方

雅浩

あまらうさ尾花う神もよわわかまの
あまらうさ尾花う神もよわわかまの

此方ああわ猪

七数

此方

康光

あまらうさ尾花う神もよわわかまの
あまらうさ尾花う神もよわわかまの

尾花うすく乃あふそらりぬ

太極

範宗

死すこい種あふこいこく折凡り

ゆきこいのあふとわくぬゆあられ

ちち方種候かす守れら坊新のわ極

八巻 古寺月

凡

康光

忘れらやうふ絶わこあははとそ

ふかよのゆりすじこらりぬ

太極

三井也

いろ坊山月いらくぬあじらり

尾られ種のおうものうら

太極

丸あ

太極

資隆

いろ坊ふこいこいこいこいこい

時をすすめぬ秋乃夜の内

太

範基

意にたりゆそら乃種のみきこい

うかこいこいこいこいこいこい

十巻

凡巻

信実

いり沿ふ扇の篠糸の色あけ
秋をばあきしとあふりの月

七

信孝子

秋をそていそぬふしりそあきと
ふら秋くとしむ少初瀬巻月

あき秋をそてのこし葉あふ
うしゆ凡巻

十一巻

凡巻

乃徳

人そそぬゆ寺の小篠をそあけて
うしゆのそらよきそり家月親

七

乃徳

あきとら秋ゆ寺の篠の色あけ
しむよの月あけよまかせて

あきとら秋ゆ寺の篠の色あけ

十一巻

凡巻

乃徳

あきとら秋ゆ寺の篠の色あけ

月三十一日の鐘の音なり

た

新法

御殿山松葉の凡りきぬひはく

もろくもかきも明しこの有

たかききそゆきゆわわ

たかき

ん

絶言

御殿山松葉の凡りきぬひはく

もろくもかきも明しこの有

たかき

絶言

御殿山松葉の凡りきぬひはく

もろくもかきも明しこの有

たかききそゆきゆわわ

たかき

たかき

ん

絶言

御殿山松葉の凡りきぬひはく

もろくもかきも明しこの有

たかき

絶言

御殿山松葉の凡りきぬひはく

月あふらねふ秋の色あれ

大分ねる常世のわが橋

十のあきさし屋

んね

女房

ふゆとの最のあつさふくあわらん
まうしにらうん秋のかうし

た

知家

あく房のあきさしあつらねふさ
ららりてうしうしうしうしうし
はる方をとまのまのわが橋

十六あ

んね

知家

あきさしあきさしあきさしあきさし
はるをさしあきさしあきさしあきさし

た

知家

凡さじくあきさしあきさしあきさし
いくつあきさしあきさしあきさし

あきさしあきさしあきさし

十七あ

んね

知家

ふしむるにうらむしめなるを
所系木の葉ふりわりれ一紙

た 花基

るしのごう移るひらとてけり
つらとれおほくもくらしき
たちちささくちまうらむしん
ちちまよこくうめわわ

十つも

んね 花基

層のうごの秋のちやんじ

はるさる月をしとよゆて

た 花基

ひらけぬんちりちよちの
らせもくしさいのた
わ首を指箱のわわ

十のち

んね 花基

花れうしとちちりさきりら
あささくちり秋乃かり
た 花基

秋ふらふらとく物おのりおわしよ
厚くこの音もくさくさしてうけ
つたわね
ちあ

んね

賢隆

海ふゆや物おのりおわして
かり乃物凡と夜とじうらん

んね

信季

山風れいれい物おわいうらん
ふりしてあつた屋敷を海と

丘新まこふのわね

ちあ

んね

康光

作新ふまゆねにとつたうら
はらうらうら物おわい

んね

敏徳

あまのやまのうらうら物おわ
まのうらうらのうらうら
んのおうらうら物おわ
まのうらうら物おわ

古くも 亨 西遊

凡

康元

よりわきまひらけりて申すはよもやれ
るもそとさきまひらけりて申す

大橋

郵部

大いそれよもやもはあはれあはれと
神のしつくと人のさうしつと

大橋 河勢 河のわき

亦らあ

凡

資隆

いそりてにらねのあはれとさう
まをいふもうわねていひらき

大

雅治

あひらきりてはあはれとさう
をいひすねていひらき

わね

古くも

凡

信実

とれちらわねは神のよもや
よすうわねは神のよもや

あまのついでにたのむまのついで

ちぢもあ

んね

ついで

らむもぬきよふむもついで

らむもぬきよふむもついで

た

ついで

さそついでにたのむまのついで

らむもぬきよふむもついで

あまのついで

ちぢもあ

んね

ついで

たそついでにたのむまのついで

らむもぬきよふむもついで

た

ついで

あまのついでにたのむまのついで

らむもぬきよふむもついで

らむもぬきよふむもついで

ちぢもあ

んね

ついで

あまのついでにたのむまのついで

よせのふきをゆれくさきとらふ

大

龍家

さとしの浪をすあきれもあねの
りもねふりしれもくくしりし

ちちふき物事くさねのちち信ら
ゆふらうて細き迷ゆわね

成敷

大

龍家

さとしの浪をすあきれもあねの
りもねふりしれもくくしりし

大

龍家

さとしの浪をすあきれもあねの
りもねふりしれもくくしりし

成敷

大

龍家

さとしの浪をすあきれもあねの
りもねふりしれもくくしりし

大

龍家

さとしの浪をすあきれもあねの
りもねふりしれもくくしりし

さしつかへなく
んちのきりぎりすのきりぎりす
さしつかへなく
いよみねのきりぎりす
さしつかへなく
さしつかへなく

たね

たね

名とりこぼし
さしつかへなく
さしつかへなく

た

た

あつちのきりぎりす
さしつかへなく
さしつかへなく
さしつかへなく

たね

たね

た

た

さしつかへなく
さしつかへなく
さしつかへなく

たね

たね

さしつかへなく
さしつかへなく
さしつかへなく

くらぬまよひのしりぞく

むすねを冠古神よりしめわす

木更敷

賢陸

んね

あやふしうらやまのまゝの
思ほしうらんはあまの

木

保子

あやふしうらやまのまゝの

あやふしうらやまのまゝの

あやふしうらやまのまゝの

木更敷

んね

康光

あやふしうらやまのまゝの

あやふしうらやまのまゝの

木

新

あやふしうらやまのまゝの

あやふしうらやまのまゝの

あやふしうらやまのまゝの

あやふしうらやまのまゝの

ん

康光

神意にあらしむるも申候なりとも
人こそしちし保身なれはらひら

太 知家

新しき移ぬるの色に毎日なす
花もたのめしむら移りありあじ
たらふしむらありんたあし
あもよめぬる色にすかちあし
あよめぬる色にすかちあし

共七女

ん 賢隆

きよのめはしきあまじりしむら
こしあしむらしむらあしん

太 孫 保孝

後河いしむら周遊しむら
こしあしむらしむらあしん

太 孫 まさね

共八女

ん 信実

そのめはしきあまじりしむら
あしむらしむらあしん

太極

如鏡

あゝしよのこゝろにぞとらふれ
いとわぬくとわりのしきふりぬ
ちかかろたこ
亦ありぬ

んね

行結

しよむのゆわくとくしん
わくはしんふりてしん
あゝしよのこゝろにぞとらふれ

んね

如鏡

あゝしよのこゝろにぞとらふれ
いとわぬくとわりのしきふりぬ
ちかかろたこ

あゝしよのこゝろにぞとらふれ

んね

んね

んね

如鏡

あゝしよのこゝろにぞとらふれ
いとわぬくとわりのしきふりぬ
ちかかろたこ

んね

如鏡

あゝしよのこゝろにぞとらふれ
いとわぬくとわりのしきふりぬ
ちかかろたこ

四十二番

らんね

後

あふらにちりしあゆとゆらひね
移ねよのなしようてよあはし

若

新法

うけしう意流にらあふはし
とええうらあふ花あのみはし

ち方柳あふまこね又あふまこ

わね

四十二番

らんね

後

あふらにちりしあゆとゆらひね
わらふはしあふまこね又あふまこ

若

新法

あふらにちりしあゆとゆらひね
あふらにちりしあゆとゆらひね

若

新法

若

新法

續奇合部類卷之十七

題

夜深待月

故鄉紅葉

河邊擗衣

行路見松

山家夕戀

罨中松風

作者

右大臣

參議九連清中将實氏卿

參議沼部卿定家卿

宮内卿家隆卿



前丹後守知家郷

右共迎督傍中将雅經羽臣

丹後守範宗羽臣

中務權大輔信實

備前守家長

兵衛内侍

判者 衆儀判 後日治卿書判詞

前関白家詩合 建保五年九月 判詞定家卿書

一番 夜深待月

丸後 右大臣

多々心裏ハ行キ一月の隔たレト
山乃ニハウリル記ル如クハ

右 治部卿

秋と云ふねたのまよひふかきあま
や海流と云ふ月と云ふ

丸心と云ふ 各戸之 右と云ふ

あらしぬをりそよ顔にささめれ
ゆしかなめますいさになつら
おきくにけゆか一他者しつをり
こふもわりのゆしなれば情にさ
てともゆさん事をやいとんとあ
けらにそゆらんをん街と色やゆ
あま

二番

凡俗

宰相中将

なるとぬおれぬういさくまわし

師らつり月おくと取あてりけ

右

知家附信

ろく、おれぬとちけりうらのえ
戸つあとのそよみふのその月
あまつらゆしついなもゆら先
れとやいさゆしふゆふその月
とふいさよふゆせとゆしえ秋
とゆりしとゆしと月ゆこあら
とととたらにやゆんとゆしと
んしゆく。る月よふさく

かゝる色もなればけりうらたの
うらうらくみはゆきとゆきまは
ゆきりこ

三番

丸

宮内

秋風よ深むけはけりまをさ
ふりうかす月とまらう

石

雅

ゆらいつくしはなまめじろ
あゆりあけむらぶのぼる月

あ育又いつくしはなまめじろ
あけゆく思のあまをさ
あそらじ月夜あまのそ
も海にさしをゆき花と顔
かといはらあめじろ思の
あゆりこころ洞はさ
あそら各待てふ
られゆき

四番

丸

範家

いてる女の月よとていふもいとよめつれど
みよのくさるるあつらふこととらぬ

右

若狭門侍

あつらふ女ならぬ月よといふことと
よめつれどいふこととあつらふこと
右左のいふことと月よといふこと
物よといふことと

丑番

丸

信実

ふらふのつらみよのつらみよと

月よといふこととあつらふことと

右衛

家長

あつらふよ月よといふこととあつらふこと
あつらふこととあつらふことと

月よといふこととあつらふことと

あつらふこととあつらふことと

あつらふこととあつらふことと

あつらふこととあつらふことと

あつらふこととあつらふことと

あつらふこととあつらふことと

けしきさへしむをれと月とらあ
あかりのうらやとて石橋のあま

六番 政卿紅葉

九

花宗綱臣

露もふれいくと秋をそと先ほん
尾と水も乃秋のともみりて

石

信實

れりひえる指しけりちちりたり
捨原結糸のあさけりみん

いくと水もそと深はらん指とあ

とちりにきり尾とのあひと
のあひはれゆらきちちあふ

七番

九

知家朝臣

人とりそ秋のなほとこのあひり
りてとこへす吹あし

石橋

花宗綱臣

とみらつとけりあふらとこあふの
秋ちりさりのちちらとあふ

たの神とていふはよき人あやう
きまのえいぢりしやゆいぢりた
右もとらひけりゆふよとて
まごま人の秋いささうりこぢり
甲かこぢりくぢりぢりぢり
ぢりしふふこぢりぢりぢり

八番

たは

高田卿

ありけのふりさうぢりのりま
ぢりぢりぢりぢりぢりぢり

石

家長

ふとやぢりぢり神のゆいぢりぢり
りぢりぢりはよぢりぢりぢり
ぢりぢりぢりぢりぢりぢり
ぢりぢりぢりぢりぢりぢり
ぢりぢりぢりぢりぢりぢり
ぢりぢりぢりぢりぢりぢり
ぢりぢりぢりぢりぢりぢり
ぢりぢりぢりぢりぢりぢり

九番

た

宰相中将

あはれをうらみかたもりおきらむれ名を
かほくはくしめあはれをいれおきらむ

石

江戸郎

はなはひいじりのまの都を
かほくはくしめあはれをいれおきらむ
んけぬもりといけり名をいり
しはくえはくしはくしはくしはくし
ちかかりかたもりあはれをいれおきらむ
きこられられあはれをいれおきらむ
ゆりあはれ

十番

見

石太臣

おほあはれいさなうらなはれ
りかたもりいさなうらなはれ

石

雅徳羽臣

あはれをうらみかたもりおきらむれ名を
かほくはくしめあはれをいれおきらむ
んけぬもりといけり名をいり
しはくえはくしはくしはくしはくし
ちかかりかたもりあはれをいれおきらむ
きこられられあはれをいれおきらむ
ゆりあはれ

とあがさうれてあつきのこの名にま
まけぬありとふ秋のほよふりま
ふしめはゆしのかつ物よわゆん
ん

十一番 河邊橋衣

丸

右の旨

形らこきりまふ中波にをんと先の
とのうてはくりまふころりてふ

石

知家羽衣

初瀬河ゆくと然るもさ月日お

あつし秋のこりもふりなまり

左右の泊瀬川いくりくのりま
まゆんゆれとたかこみふ右ら
えんたうとぬらりくにんえゆれ
まうりまおゆき色られゆりま

十二番

丸

宰相中将

里ちめくそく谷川もまうとて
ふりやうりとのととれこやけこ

右の旨

雅経朝臣

とあかきつれてあつきのこの名にま
まけぬありきふ秋のなまうりま
ふしゆはゆしのかつねおらふゆん
らん

十一番 河邊播衣

丸

右大臣

おらふきつるあつきの波にまゆと光の
とのつはらりふゆらりてふる

右

知家朝長

初瀬河ゆきとあかきつるあつきの日

あつきの秋のこらもふゆらり

左志の泊瀬川いづくのうら

まゆらゆらねとあつきのみお右志

えんふらとあつきのあつきのあつね

えうらとあつきのあつきのあつね

十二番

丸

宰相中将

里あつきのあつきのあつきのあつね

あつきのあつきのあつきのあつね

右

雅経朝長

秋ありてゆくことのさしあはれ
思波もわきうけしるもな

たの谷川もこゝろをしのぎて
さやけさふらりてあそびて
くみもゆきよりの里の川を
波もくもくしるの初春に
よもあつてなほゆくたれ
るもゆらりて

十三番

丸

沼部郷

こゝろの河もこゝろのゆきも
こゝろの雪もこゝろの雪も

右

共持門侍

かゝるにやまの雪の河凡
さぬもれもこゝろの雪も
たなつとわきこゝろの雪も
七束の雪もにみくらくゆ
かたひくもこゝろの雪も
こゝろの雪もこゝろの雪も
こゝろの雪もこゝろの雪も

目又作らん

十四番

丸勝

宮内

高き申り川邊の里より行り交
ふさしやふさしり交りあはさ

石

信実

細代あにりみられ瑞ふささ
しりやあはれ松島治人
とみられ瑞ふさささささ
ふさしりりりりりりりりりり

ふさしりりりりりりりりりり
ゆんしりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりり

十五番

丸勝

範宗朝臣

虫月やうられ何れ凡さじりり
松のしぬ人しりりりりりりり

右

家長

朝夕のあつりにささしりりりり
はさしりりりりりりりりりりり

凡方雅らうくよんくゆら下
右橋交れらうく落忍のう
各尸されゆくとんたうらとらよ
洞り舟とまくとゆらうこ尸
ゆくしう品の川も少く橋まふ
りらいつしこして凡橋ゆらり

十六番 新路見立

凡

雅治朝臣

おらふと心んくうらハちあひの
わいさくゆらえらふと

右

共保内侍

新波ありまゆらうらにまらあて
そしてあふはのりかたれり
あこあひのたかきくうら
ゆらうらうら七新波なふ
うらうらうらよとれりかた
うらうらにゆれとゆら
ゆらうら

十七番

凡

知家朝臣

ゆらうらゆらうらゆらうら

こゝろしこらいつらのつたふのつあを
そねあしゆらよ社の又芳

右

伝実

たれとけくちてにあさるふの井と
あふいさるさる解をいひせら

あそらとらたりたりこころいのは
とれくやしてあ物

十八番

た

あふら

そらととく井ての下あふさうりと

じとこわ野一の葉のゆらりに

石

家長

あのもう葉いさそやなほは死の
ゆいてたらな一井てのまふ

たこらこのつさあかつまふ物

らんかその下れいふあ物と死

あそいさゆるこらうらこらい物

あふこやあうらよあらこら死た

りひらりあらさんあははこま

ああこあらさんあははこま

りぬ夢への夢のつゆりいあらは
ふくふ内はたけけられゆいそ
乃抄

十九番

尾指

宰相中納

いふそそふゆらむれ舞そとそ
あれい人の野一の白鳥

右

花宮下

あつさのふあつら流流あつらこや
みられゆくてれ神ふんじい

んふあつらうーゆりこ石とさ
なう那ゆめとらそかすあゆ
ゆすゆらこやうさうそゆり
こいその音と又こすれゆらり
きりしたそこは流流流れま
りこたふさうれらうそい
うてな流ゆりこ

又番

尾

右尾指

みらのくのたさうりゆらそたぬ

ひよひとあつとみふたうひ

石

宮内

ふしれしれあの子の交ひささの
一目しりりよみされささ

あそともしり懸ふりくすく
ゆきこくおお

か一書 山家ノ志

ん 後

石石長

おくのしりささゆくと拂ひ
身とふふの夕言とら

石

岩場ノ信

たの光りしけりあさりの夕い
こゝのあめれたる人の里

あそこすにりあうりうへ
されゆりあちのまのす

よりくやゆんととるゆりて
以たる後

か二書

た

宰相中將

はきれとて飛中よあねにうん

くみりぬらぬのこの雅し

右

後実

くみりぬらぬのこの雅し
まじらひの雅の父くれ

このほろい又いしうりし
ゆりぬらぬの雅の父くれ
ても殊つりぬらぬの雅
ゆりぬらぬの雅の父くれ
まじらひの雅の父くれ
まじらひの雅の父くれ
まじらひの雅の父くれ
まじらひの雅の父くれ

くみりぬらぬのこの雅し
まじらひの雅の父くれ

可三番

凡務

浴巾

くみりぬらぬのこの雅し
まじらひの雅の父くれ

右

宮内

くみりぬらぬのこの雅し
まじらひの雅の父くれ

くみりぬらぬのこの雅し
まじらひの雅の父くれ

また後つらうしきめりつらうしき
やふれゆめくちちちちちちちち
つらうやんちちちちちちちちち
女四番

尾後

知家初長

暑寒のこもるういふおま言と
しりふらういふおま言と

右

花宗初長

れりいられ悪とあんとまふこいめ
た心のつがのあふれ又言

たとあつて河まことたうらうら
をすかりいぬれとこのつがの程
のゆめらうたしんまうつら
のしんまうらとあつてあんとま
みえいぬらうらとあつてあんとま
らうらとあつてあつてあつてあつて
なまのあつてあつてあつてあつて
とこのあつてあつてあつてあつて

女五番

尾後

雅經初長

らほりみーそのふさしてれ夕言さ
ねとねふらうねのふきさつ

右

象長

夕月東しらのふれさあれ
ちりふこころとふたれくらつ

んちりこころとふたれくらつ
はさあじらひのふ水之原夜守
合ふゆしうふ内つふさしり
してん結ゆりりこころ

大六番

舞中ね風

左

信實

をさうりねのあらしこれあらしこ
うりせみうしあらしこ

右

結信

ふりりともあせふらふこの最のね
せうこのねはもれふのくこ
ねのあらしうらうらうらう
いうこのふらふらふらふ
なれらうらうらうらう

右

結信

廿七番

丸

知家初長

り海より本れはちかくくうはゆり
まらうりうくぬくせいのきりか

右

家長

らびりりりあうりくぬくおまたん
野らしらうらうらぬくの坂

西首まうりくぬく一月かた

廿八番

丸

初長

なれぬまれだんぬるも海とまぬ
ふのこしく人やまじとらん

右

雅經初長

りあ海と野中れねとさうら
とら海と丸とをさうりり

丸守又とせ海ゆへりく可給のよ

しとらくぬくも海へえ起とら

海へゆくと

廿九番

丸

宰相中将

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

續方合部類卷之十八

又十六番方合 建保元年十一月旨



題

冬之山霜 冬野霰 冬閑月

冬之河風 冬海雪 冬夕旅

冬夜戀

詩人

た方

御製 勝三首 拾三首 頁百

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

權大納言兼右近衛大将源朝臣通光 勝二之 廿五之

兼議大近衛權中將藤原朝臣實氏 勝一之 廿三之 負三之

兼議治部卿藤原朝臣定家 勝三之 負三之

大近衛權中將藤原朝臣忠定 勝二之 負二之

右兵衛督藤原朝臣雅經 勝三之 負三之

中務權大帥藤原信實 勝二之 負三之

兵衛内侍 勝二之 負一之

右方

宮内卿藤原朝臣家隆 勝一之 負三之

俊成河女 勝二之 負三之

丹後守藤原朝臣範宗 勝三之 負二之

八條院高念 勝一之 負三之

前丹波守藤原朝臣知家 勝一之 負三之

右大臣兼大近衛大将藤原朝臣 勝二之 負三之

左衛門權少尉藤原康光 勝二之 負三之

權中納言兼左衛門督藤原朝臣忠信 勝一之 負二之

講師 知家朝臣

判者 兼議

隱名付詞 治部卿定家河内後白河院平

歌合

一番

冬山霜

たぢ

御製

あつやみひろの山れいとあをけ
うきとこみくは雲いゆりこり

右

宮内省家隆卿

ふさきのこころやいらこ夕暮の
そみくしるこ霞のあせり

たふをすこころいこころ心河おけは
の秀色之神無比類し由満流るり

右ののちろくはあゝゆゑに文に
とくまゝくゆゑとて井くあつて嵐の
村又元佐のあひよりつゝはよのゆゑと
中出ゆゑとま月つて友系初はたの万葉の古
風本あもこくくつゝゆゑとてあゝ
にともゆゑのゆゑゆゑとてあゝゆゑ
しと相依てあゝゆゑ

二番

たお

右大將通光卿

朽ゆゑ本の紫下るこ山風

ゆゑゆゑあゝあゝのこ山

右

俊成の女

ろり秋の露あゝの山風

あゝあゝあゝあゝの朝霜

あゝあゝあゝあゝの作者名俊なりりや
ゆゑをたのゆゑあゝあゝあゝあゝ
ゆゑゆゑあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
このあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
橋のろり柱はあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

よはねおのけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
あしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあし
定やけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

三番

たお

た中將實氏

み山路や月くまらぬ木の葉の影
えりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

右

丹後守範宗朝臣

うけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
あしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあし

たお耳くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
あしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあし

四番

を 膳

治部卿定家卿

あしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあし
あしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあし

右

高倉

祇正月御田の山けやまむめし
うんあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあし
たああああああああああああああああああああああああああ

ふたつとくふま回山の山姥いともう
こころしゆりし報やお作りをまめ
つ友系郎信清加朝たて後之由定中

又妻

た勝

た中將忠定郎信

ちりまてくこの本れ業と後とて
をのもやとおつとこあらとて

右

前丹波守知家郎信

せく霧のみちもぬ色のまの山
今ねのひらうとてうみよりなり

たるるる歌うく優く作に常作うく
た下白うゆうあしくまゆりうい
中出してゆいふ勝く結定ゆあふ

六番

た

右長衛門雅經郎信

山風くみじられ木のゆらり霧の
下草やまてあきらまにけり

右勝

右大信

あとうまの山路の霧とあるか
とれこの色とあふりむる

このはらひとふまゝに〜
各一竹に五月の末の〜
文書の柄本のすゝとほとせりゆりて勝
とけき竹の

七番

た勝

中勢権太補任實

すうれ福もろろひかろろろに

夕おつそ九山の〜

右

左勢権太補任實

くはを山尾上の後や多けり

日〜〜〜

あそ優つらよ〜

かし右の〜

よみろ〜

ねい〜

うろ〜

八番

たお

左勢権太補任實

海を〜木の葉の〜龍田の
をの色色う〜

右

たきの湯志信の

あーあけふうううういあまてい
霜のありあふく湖の色うか

たのき新ゆくと右方山うううう
くわうりて草子む老とりにあゆ
ぬふい中ゆしうしあううううう
やとてうううううてる物

九毒 冬燈寂

た勝

御製

武蔵野のあふみかううううう

あうゆうゆうううの音うわ

右

文月卿家隆の

やふの状くあううあうう右乳山
あううううううううううう

た新實の文章相意之法を海勝の由名
中右方やうこの海草いふううあ
れの色くわうううううううう
もみしゆううううううううう
あううあううううううううう
中々海取たる勝

十番

た勝

右大將通光の

本指くろくひとてくろくまの地の
萩のちりねくあつとくろく

右

俊成の女

あつとくひわあそくろく萩の神なりも
うしろ此へく萩ありはし

たを其能右あつとくろく切しにわ
あつとくろくあつとくろく萩の野くろく
ろくろくろくろくろくろくろくろく

人ゆくといたる勝

十一番

た

實氏卿

あつとくろくあつとくろくろくろく
あつとくろくろくろくろくろく

右勝

範宗朝臣

はつとくろくあつとくろくろくろく
あつとくろくろくろくろくろく

た右よりあつとくろくろくろくろく
あつとくろくろくろくろくろく

てやしうむいぬらうじひゆしとら
さいちりて以右為勝

十二番

た勝

治部定家卿

あまのえをきくわくむく備えて
りしとみさうし世のさる

右

き倉

あまの池のおをさうみは風く
りしとさうひくえのさる

右いおしとみさうしとた勝しと

各さうしとみさうし

十三番

たお

忠定朝臣

かきゆらうの葉のまのり山風く
りしとみさうしとみさうし

右

知家朝臣

あまの池の葉のまのりとみさ
うしとみさうしとみさうし

たのすしとみさうしとみさうしと
りしとみさうしとみさうし

福しきあまの月の夜みくらん

右

文月卿家隆の

ささきのかりとよしの浦まのなほ月
ささきのとよしの浦まのなほ月

あまの月の夜みくらん
あまの月の夜みくらん
あまの月の夜みくらん
あまの月の夜みくらん
あまの月の夜みくらん

十八番

た 勝

右大將通志の

神立月こもる月の夜みくらん

目くらりちすまあふくの関身

右

俊成の女

治平の雲浪風さあふくちよちよち
ふけの月こもる月の夜みくらん

右下白つひさきとちよちとちよち
之以たる勝

十九番

た 勝

實氏卿

残つる家月の夜みくらん
雲くらやとちよちあふ川の関

しし南唐の勝負と被さくゆり
めて後の不審とのうゆらん

カ一番

たお

忠定朝臣

おぼろをまてあてて松の葉を

しくれもあぬ月をふりふ

右

新藤朝臣

遠さやかりぬ松のまこけに

月をまてしわとさりらと

おお又優く雅とて他者やうと云

坂の松乃志をねとあぬをことわす
うねりしあゆみのりおゆりなる松

カ二番

たお

雅隆朝臣

清見とて月影をり冬のおく

をのまてあぬ松の葉を

右

右大信

月影の嵐をさし出りたり

衣の閑れ色うみしは

けあ又おく被定ゆり

カニ番

た 胎

信實

と海のうきうき秋とそあぬ閑守と
あつ霜あつ月とみあつらん

石

藤系康光

あけくけり冬の宮庭のゆみして
月をみよころ木わりの風

秋とそあぬ閑守のころ霜あつ月と
ころあつゆきとくる猪

カニ番

た 胎

長衛門信

と海の雲がく霜あつ月とみあつらん
月とみよころ木わりの風

石

志信卿

あつ霜あつ月とみあつらん
月とみよころ木わりの風

あつ霜あつ月とみあつらん
月とみよころ木わりの風

カニ番

た 胎

河製

ふゆのよはれ葉の後若くすこあり
こももわけそり風のそくし

右

家隆卿

きりこ川木の葉れ後のそくも
風のそくしこりりりりり

あ首のよの葉おちりておれそく
よいおちりりり風のそくし風のそく
りり水くはるししんそりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりり

廿六番

たお

右大將通光の

みあそ何葉おちりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりり

右

俊成の女

楊梅の結束じりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりり

廿七番

たお

實氏卿

よひのまらひあけぬ水くみし月と
あけてるさうらさなの河風

右

範宗親臣

さゆり萩の松風わさう山川を

さらしあは流るるさうさゆり

たのふもそつらうあつらうさゆり

ゆしと水くさうさう月影さうさゆり

らんさうさうさうさゆり

定也

廿七番

たお

定家卿

山風のいそぎあはれとをさゆり

いそぎみさうさうさゆり

右

高倉

山あふかきさうさゆり

さゆりにさう風のあはれ

おまた又あはれさうさゆり

さうさゆり中ゆりさうさゆり

ふさうさう中人ゆりさうさゆり

廿九番

たか

志定朝臣

水鳥の書ねやまーは立田河
波りぬのこくみ移のさく

お

知家朝臣

波のうらみさかりあつらぬ氷さとの
かまの風を舞う来さす那

た水鳥の書ねくおまの波さめのさ
かみとまありてそくゆとあまの風
水鳥又おろし公優ふゆまの書ねとま

や

可書

たか

雅經朝臣

まの波とけぬも書とゆり里
あかまのさくかの河のさ

お

右大臣

うらみさかりあつらぬ氷さとの
かまの風を舞う来さす那

おのまのさくかの河のさ
ゆりあつらぬ氷さとの
かまの風を舞う来さす那
あかまのさくかの河のさ

可一番

た

信實

河の勢よく流るゝとさへ此風の
あけもかきぬ冬の 橋

右

藤原康光

吹風にみまもやとくこゝろん
河原の波乃書りすくならぬ

とい凡冬の橋天のうしにふかゆて
右のわが優く竹道の勝つよりをり

可二番

た

長束也持

月すまらじとぬありのも清流の
勢よくあさうの流るるもく

右 膳

忠信の

あひあそく流なりし水鳥れ
をのり風とありし吹くあり

たしあふまらじとせら誰なり右
あり親より三つよをよひくつれとあり

とにうらしくこゝろもそ勝とさあり
とつれとあり

可三番

冬海言

た

御製

風さむしと日影もいづこもり雪ん
人やらおしぬいぢりるも海萩

右膳

家隆卿

けものうらふ半海ありてあり雪の
あまきうらぬく海ふりゆ多祢

人やらおしぬいぢりるも海萩
風さむしと日影もいづこもり雪ん
あまきうらぬく海ふりゆ多祢
みゆゆりと釣女あ海ふりゆ多祢

けものうらふ半海ありてあり雪の
あまきうらぬく海ふりゆ多祢
みゆゆりと釣女あ海ふりゆ多祢

かに書

たお

通光卿

あ海まじと吹久すしと風く
きましてそそけり雪のふり浪

右

俊成卿女

あ海まじと吹久すしと風く
きましてそそけり雪のふり浪
あ海まじと吹久すしと風く
きましてそそけり雪のふり浪

あふれぬちかかすしすり海人の夢も
拵ふぬりしあつこうくやしや
岸のくもよりあつきのうとけり
まことあり申ひくち作れと
こころみしりし作れぬ物と定戸

可又書

た

實氏卿

あつりぬちかかすしすり海人の夢も
拵ふぬりしあつこうくやしや
岸のくもよりあつきのうとけり
まことあり申ひくち作れと
こころみしりし作れぬ物と定戸

右 勝

範宗卿

ありしむしきゆぬ夢の波れよ
つじつりりりしゆの松
たをせり難しきこし作れと
やくと作れぬ勝

可又書

た

定家卿

任のはれはつくりりり松の雷
あつりし何とたしや念ふ

右 勝

実氏卿

任のはれはつくりりり松の雷
あつりし何とたしや念ふ

ちきりうさこの雷のあつ浪

任の乃松遠海乃浪なるふと花とみ

すくもろのうけつりしきりたるこ

この言れあ浪いとおうくこさし

ゆとは右勝しこめり

可七番

た 拵

忠定朝臣

浪のよきせしきりしきりしきりし

ろくしきりしきりしきりしきりし

右

知家朝臣

あまのすし里のよきと根くも

あぬと海ちの言れ又ら拵

はらあまのまきりしきりしきりし

つら凡情のあまきりしきりし

ゆると里のあまきりしきりし

ちととろのめらのつとととととと

ハ拵と定り

可八番

た 拵

雅経朝臣

こころうりし海士のまやもはらし

きよきやうのついでに漢れあ〜言

右

右大信

うか〜や約丁〜お〜に漢書の
あま〜う〜あ〜心〜ぬら〜

きれとあ〜この漢れあ〜言ひ〜
言〜こ〜し〜竹とや〜れ〜やほり丁
真〜う〜う〜字竹より〜常〜之〜云揚負

可九書

たお

信實

きこの海にれ〜も〜う〜に漢れ秘の

電と印と〜と〜と〜と〜と〜

右

康光

あまの〜う〜言〜と〜と〜と〜と〜と〜
し〜ひの〜と〜や〜し〜は〜ら〜ん

た右〜く〜優なり〜に〜中〜之〜又〜わ〜お

四十番

た勝

長島内信

あ〜さ〜う〜う〜と〜所〜し〜山〜舟〜る〜あ〜
難波の書意の書れ〜と〜と〜

右

忠信

をいふて詠ふこりひ松いはや
いり(のふれ言のいこむ)

難波のあしれ言のあしおとらとら
こいおしけりようい一箇ふしてあゆ

軍一巻 冬夕猿

たね 御製

お色いばいさるふしの文をい

おあしをいさるふしの文をい

右 冬夕猿

あはらういけいやい中いあうい

いさうり冬のあしおとら

お色いばいさるふしの文をい

あしおとらあつらふしおとら

あしおとらい海産いけいおとら

おしおとらい海産いけいおとら

勝といはしけいといはしけい

と

四十二番

たね 右夕猿

からい人のいはしけいといはしけい

新ぬぬ雷のすゑり山のい

右

後成の女

いふかやあざりらつら文きあり
やそぬきらのされあうも

たのきぬ雷おあつれさゆんこやえ
右とよらう事なりとてあは

軍十三巻

た勝

た中將實氏

かりりみやうさころあさにはらうこく
あらぬぬもあらしとそ

右

能宗朝臣

あきくもそきあのじと路のさたあ
あさもさあしとあ

右の指難あし作しとあさぬのさ
ほねくうあし勝之うし定中

軍十三巻

た勝

治朝の定家卿

川むとぬあはあもああのもりこ
ああはあさあさあさあ

右

三の金

紫の唐れ山風はるる冬の日と
くれはるるあそびくさるる

右方こゝろとくさいとあうくみはゆり
と依る気以たる勝

四十六番

た

忠定朝臣

ありくくくくくくくくくくくくくくくく

夕日ちうすくをらの白雲

右

知家朝臣

冬の日乃折く移るるくくくくく

が仰るのきん武蔵北の系

徽陽之経野離之程長途之遠望行不

畫殊匡之由各巾之為勝

四十六番

た

雅経朝臣

晴くまうりくく海空やらとわん

日影しいくくさや乃中山

右

右大臣

夕ぐれの霞まの雪代吹風乃

あそびみわくくあそびのあそび

日新もいとくふやの中山のふりくま
ゆくと吹風のめくみねくむらうく
やゆらんともく人くくゆて胸とくく先
らく

四十七歳

た 拵

信實

ありくけいりちふふちくくく
くもあゆんたもあくわくく

右

友原康光

冬のおくくくくくくくくくくく

ひすゆちくくくくくくくく

あし葉のくもあつたひくくく優く

とやなまきくひくく木と誰なくく

てるゆ

四十八歳

た 胸

長瀬内傳

さひわさり煙ろくあそくくく

君家の山乃朽くれゆふくれ

右

志信卿

葉枕くくくあれ夕くくく

いづらもどわらそらうじん

いづらのにもあそそそとそらうじん優にうん

さゆ名中てる勝

四十九歳 冬求意

た 勝

御製

おまのかきふし色かひいふし

人のこらわあふい米のし

お

高野家隆

お人の座れありあふこらわいふし

おそそらりうれくし

右衣子座のふれ紫うしそらわいふし

くんしゆきわおまうらあく人の心

とゆりあふし霜とあふしあふし

ゆきふし一何くやうた端とゆ

又十歳

た お

右大將通光卿

きえらうらうおの衣とくしと

みりあふれがらあふのうし

お

後成卿女

けいしーの装わあふのし

海くまのりそその月あけ

ぬそらしく優よゆり由一月やる

五十一番

た

た申侍實氏

月とあとははななこ人の氣とあそ
をともあひぬ袖うちさし

右勝

能宗朝臣

はかりし人のこゝろや都らん
月とよゆぬ雲のちゆ草

たもすこ優よゆりと右月とあそ

霧の冬草なりとあそゆりひいさるわ

てる勝

又十二番

た

治部定家卿

雪と春のうねれどととつとあそ
こりりりりちちちのやいさ

右勝

三倉

かろとあそあそとととととと
まもろのしちの流あそねん

侍のをととととととととととと

あも優又作りとたの神はこなりとがこ
祈るもおまの誓状ひとひのひを
祈るとくはく作りと〜名一之為物

又十六歳

た 行實

くれ竹の市とよくのあ〜あ
うのしす〜ゆいの宿うか

右 揚 康完

今〜人のこ〜とよのゆきす
ま〜やわ〜し〜おあを

たの色竹と〜り〜と作りと右
優つり〜し〜脚や〜

又十六歳

た 勝 名衛内侍

海河神の〜水のこなりとら
う〜の床は〜し〜

右 志信卿

そあぬ〜と〜し〜鳥の
お〜名お〜し〜や〜
たのあ〜と〜作り〜たの網

すゝの有るゝゝおゝゝゝを侍道行漢
症中可勝之由

此後

...

...

...

...

...

...

五

一

